

富山湾漁場環境総合調査（藻場）について

富山県水産試験場 栽培・深層水課
主任研究員 浦邊 清治

1 背景・ねらい

藻場は、沿岸域の生物生産を支える重要な場所である。平成13年度に実施した調査結果から、一部の藻場の衰退が懸念された。このため、湾内の主要な藻場において、海藻の分布、季節変化および経年的な推移を把握することが求められていた。そこで、平成18年度に、湾内8地先の藻場を選定し、富山湾における海藻現存量を把握した。

2 成果の概要

（1）繁茂期の海藻現存量

海藻の繁茂期である春季に海藻現存量（湿重量； gww/m^2 ）を調査した。ガラモ場のみられた地先では、海藻現存量の平均値が $1,000 gww/m^2$ 以上であり、それ以外の藻場がみられる地先より多い傾向がみられた（図1）。

（2）海藻現存量の季節変化

海藻現存量の季節変化を調査したところ、多年生海藻が優占する藻場では、海藻現存量が周年安定していた。一方、1年生海藻が優占する藻場では、海藻現存量が春季および冬季に多く、夏季および秋季に少ない傾向がみられた。

（3）海藻の現存量の経年変化

魚津市青島地先において、過去の知見と比較したところ、夏季および秋季の海藻現存量の減少傾向が確認された。



図1 氷見市小境地先のガラモ場

3 成果の活用面・留意点

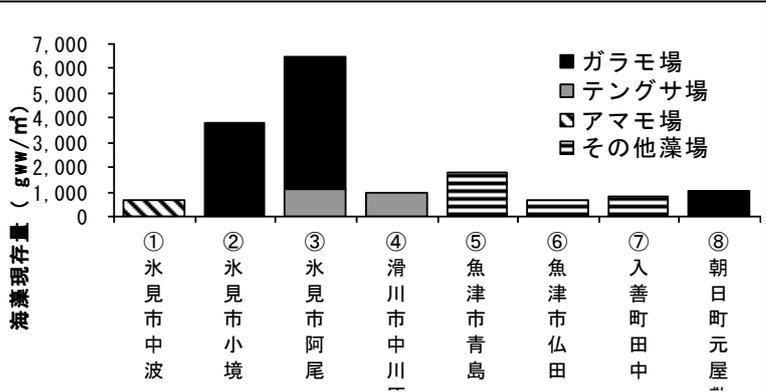
藻場を保全していくためには、藻場面積や海藻現存量を把握することが重要である。今後の調査においては、第1回目（平成13年度）、2回目の調査結果と比較することにより、湾内の藻場の経年変化が把握できる。今回の調査でも衰退傾向にある藻場が確認されたため、その要因の解明が必要である。

4 問い合わせ先

水産試験場 栽培・深層水課 担当：浦邊 清治
TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ

(1) 富山湾内8地先の繁茂期における海藻現存量
 ガラモ場のみられた氷見市小境地先、同市阿尾地先および朝日町元屋敷地先では、海藻現存量(3~5水深帯の平均値)が1,043~6,497 gww/m²で、それ以外の藻場(テングサ場、アマモ場およびその他の藻場)のみられた地先の642~1,750 gww/m²より多い傾向がみられた(図2)。



(2) 富山湾内4地先における海藻現存量の季節変化
 多年生海藻が優占する氷見市中波地先、同市小境地先および滑川市中川原地先の藻場では、海藻現存量が周年安定していた(表1)。1年生海藻が優占する魚津市青島地先の藻場では、海藻現存量が春季および冬季に多く、夏季および秋季に少ない傾向がみられた。

表1 富山湾内4地先における藻場の主要構成種の生活型と海藻現存量の季節変化

地先名	主要構成種の生活型	海藻現存量の季節変化※
氷見市中波地先	多年生	四季を通じ概ね中
氷見小境地先	多年生	四季を通じ概ね大
滑川市中川原地先	多年生	春季と夏季は大 秋季は中
魚津市青島地先	1年生	春季および夏季は概ね中から大 夏季および秋季は概ね小から中

※現存量：大 1000gww/m²以上，中 100~1000gww/m²，小 0~100gww/m²

(3) 魚津市青島地先における海藻現存量の経年変化
 海藻現存量は、春季および冬季では、平成元年または昭和63年の値と平成15、16、18、19年の値とで大きな差は認められず、減少傾向は認められなかった(図3)。これは、ワカメの繁茂期が海藻現存量に反映していると考えられた。しかし、夏季および秋季における海藻現存量は、平成元年または昭和63年の値に比べ、平成15、16、18、19年は明らかに減少していた。よって、魚津市地先における藻場では、ワカメ以外のマクサなどの海藻が減少しており、衰退傾向にあると考えられる。

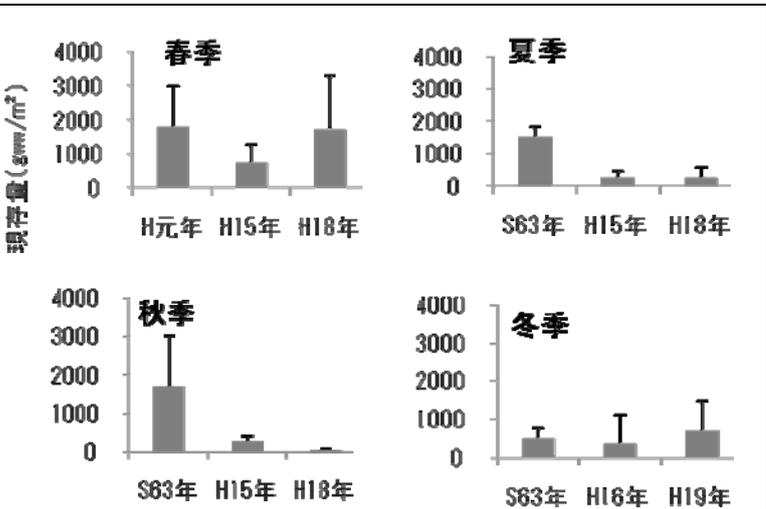


図3 魚津市青島地先における海藻現存量の経年変化

【引用文献】
 1) 富山県水産試験場(1990): 地域特産種増殖技術開発事業報告書(巻貝類グループ), 図23~28から抜粋, 改変.
 2) 富山県水産試験場(2003): 平成15年度魚津市造成漁場等調査報告書.